国内活動

5/15	【東京白梅会】で活動紹介　中野サンプラザ
6/21	【盛岡第二高等学校・文化講演会】にて講演　岩手県立盛岡第二高等学校
6/22	【WFF 20周年・ILCA 25周年記念交流会】にて講演　霊南坂教会
7/9	むさしのみたか市民テレビ局アンコールアワー収録　三鷹市 ＊2002年12月、現地におけるカラの活動が放映されましたが、今回放映される番組は新たに収録された代表の話も加え、再編集したものです。11/10～16に武蔵野三鷹ケーブルテレビ(MMCATV)で放送されます。 また、WEB（http://mmctv-douga.sakura.ne.jp/）でも動画配信されますので、是非ご覧ください。
9/3	【宮城学院中学校高等学校　125周年記念文化祭 朝の礼拝にて講演】　宮城学院中学校高等学校
9/17	【国際協力草の根トーク～ アフリカへの草の根支援～】　京都・龍谷大学アバンティ響都ホール マンスール・ジャーニュ氏、ドゴドゴファンド、緑のサヘル、カラ等によるトークイベント
9/18	【国際協力機構（JICA）とNGOによるアフリカへの草の根支援 ～マリとブルキナファソの現場から～】 緑のサヘル・カラ合同JICA事業報告会　JICA兵庫
9/23	【せんだい地球フェスタ2011】　＊CARA＝Help＝仙台、宮城学院参加　仙台国際センター
9/25	【第22回 三鷹国際交流フェスティバル MISHOP WORLD 2011】　井の頭恩賜公園・西園
10/22	【第16回　東京盛岡ふるさと会にて活動紹介】　ホテルグランドパレス

<2011年11月以降の予定>

＊期日が確定していないものは事務局までお問い合わせください。また、変更になる場合もございますので、詳しくは事務局までお問い合わせください。

11/12･13	【アフリカンフェスタ　2011】　横浜・山下公園
11/13	【第31回　むさしの青空市】　武蔵野市民公園
11/28	【日本中近東 アフリカ婦人会主催　第16回チャリティーバザー】　ロイヤルパークホテル
11月未定	【カラ3年間JICA事業「女性による保健環境改善事業」報告会】　JICA地球ひろば
12/8	カラ主催 チャリティーコンサート【かけはし2011】　銀座・YAMAHAホール ＊ 来年のコンサートは2012年12月2日(日)に、銀座・十字屋ホールで開催予定です。

からばす（Calebasse）－第26号－　2011年11月1日発行

特定非営利活動法人　カラ=西アフリカ農村自立協力会　http://ongcara.org/

東京事務局
〒180-0002　東京都武蔵野市吉祥寺東町1-1-6-102
Tel:0422-29-7640　Fax:0422-29-7688
E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局
BP　E367　BAMAKO　MALI
Tel:223-2020-9096　Fax:223-2020-3589

支えあう喜びを新しい世代へ

からばす

Calebasse

企画/編集/発行　特定非営利活動法人
カラ=西アフリカ農村自立協力会

デザイン:DeeplusDesigns

Issue Number 26

第26号（2011年11月1日発行）

CONTENTS

p1 アフリカに魅せられた男　カラ会員　秋山 清子
p2 現地活動報告
p4 10月のマリから・・・・・・・・・・・・・代表：村上 一枝
p6 マリ共和国への旅
● 2011年5月　私と妻、そして娘が先輩である村上さんが待つマリ共和国へ行った。・・・・・・・・・・・・・・・・・・神山 博光
● とうとう行くことができました、長年行かなくては、と思っていたマリに。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・神山 明子
p7 ● 10日間のマリの旅は驚きの連続でした。・・・・・・神山 有佳
p8 国内活動予定

アフリカに魅せられた男

カラ会員　秋山 清子

夫、秋山忠正が他界して一年あまりたちました。個人的な思い出話はお聞き苦しいと思います。ただ、あたら青春を太平洋戦争に投入せざるをえなかった世代、遠からず誰もいなくなってしまうこの世代への鎮魂の気持をこめて、その中の一人である秋山の歩みをたどりました。

1943年秋、大学卒業と同時に海軍に入営し、海軍経理学校を経て主計士官となった秋山は、1945年8月15日、四国松山の海軍航空基地で敗戦の日をむかえた。「生きて帰ってきた。運がよかったね」これは秋山にとって聞きたくない言葉だった。
無謀な戦争に不信感をもちながらも、戦場に臨む彼らはみな、祖国と同胞のために命を捧げることだけが、自分たちにできる最善なのだと受け止めていた。秋山にとって生き残ったことは、不本意であり、死んでいった多くの戦友に対する負い目として、生涯消えることのない深い傷になった。

それからは、戦後の復興のため経済成長の担い手として働いた。それなりの業績をあげ昇進もした。だが、これでいいのか、単に企業の利潤追求のための努力にすぎないじゃないか。これが自分の真実の生き方といえようか。心の奥の負い目が頭をもたげてきた。

そんなときに松山時代の戦友である伴正一氏との交友が再開した。当時、青年海外協力隊事務局長だった伴さんは、協力隊の活動について熱意をもって語った。秋山は眼のまえに新たな世界が開けたような感動をもって聞き入った。
秋山はやがて「協力隊を育てる会」にかかわり、60歳前後から現地隊員を支援するアフリカ行きをはじめた。少年のころから未知の世界への憧れをもっていたという彼は、アフリカの大地に魅せられ、そこで活動する隊員の意気に感じ、自分にできる支援を模索した。
隊員と接しては、欠点より長所を大切にし、相談事を持ちかけられれば親身になって一緒に考えた。ことに帰国隊員の就職については自分のできるかぎりの縁をたどった。企業側も海外事業に派遣する人材を必要とする時期でもあって、帰国隊員の受け入れがうまくいった例も多かったように思う。

アフリカ行きは協力隊支援にとどまらず、アフリカで活動するNGOのいくつかと、深いかかわりを持つようになった。そのひとつに村上一枝さんの、「カラ=西アフリカ農村自立協力会」がある。
「このおばさん（れっきとした女史の村上さんに、何と失礼な）50歳にもなるというのに、一人でこのマリで大事業に立ち向かっている。大丈夫か、見ちゃいられない、しかし彼女の地道な取組みは本物だ、何か力を貸せることはないか」。秋山もカラの活動にのめり込んだ。彼は何か役に立っただろうか。先日、私は村上さんに聞いてみた。彼女曰く、「先生は応援団長です」
―なるほど応援団長か、応援団長にはいささか道化的雰囲気があるものだ。時に辛口や毒舌もでるが、芯には愛情がこもっている。秋山の役どころだったかもしれない。

もし危機があったら一緒に泥もかぶろう、という秋山の心づもりも杞憂だった。カラはみごとに成長した。村上さんは現地と日本とを行き来しながら、健康管理も怠らず、安定した精神力で、ゆるぎない活動をつづけている。
いま秋山はあの世から、「きみは成長したねえ、あと10年元気でがんばってくれよな」と慈父の心で声援を送っていることと思う。
私も亡夫とともに、カラのよき歩みを心から祈っている。

http://ongcara.org/
からばす NO.26 2011/11/1 発行

現地活動報告 2011年4月～2011年10月

本格的な雨季に入り農作業が優先される時期ですが、何と言っても今期のご報告は、育ててきたK会の女性達の活動状況についてです。

この会について改めてご説明しますと、家族の日常生活を健康面で管理する女性達を主体として更に病気のない生活環境を構築する為に、人々に衛生環境改善の意識を高め、普及するよう組織された1村5人構成の女性グループで、いわゆる健康普及員です。

彼女たちは現在のトゥグニ村31カ村に組織され、途中脱落した村が1カ村ありますが、他の全員は13日間の研修で多くを学んでもらいました。この研修は今年3月に全てが終了し、いよいよ学んだ事を村の人たちへ伝えるステップに入ったのです。今まで人前で話すことがなかった女性達でしたが、上手に話します。頭にインプットされたことを、立て板に水を流すように話します。つまずくと、直ぐにスタッフのアワが助太刀するか、いつも同行して聞き覚えたアシスタントスタッフが代講します。

研修に脱落した1カ村は、彼らのわがままによるものです。昨年6月に研修を一緒にすることとなった村と仲が悪い、という理由でした。今になって単独で研修をしてくれと言うのですが、カラは納得しません、勉強したいなら何処かの村で行なっている学習会へ参加して覚えなさい、と言っています。プロジェクトが計画通りに進まないと大変な苦労で、経費もかかります。

この事業間、3年間には難儀することも多かったのですが、学んだことも計り知れません。限られた経費の内での支援ですから、お金に縛られることもあり、反面、お金が無い方が彼らの自由な発想を引き起こせるのではないだろうか、など色々なことを考えさせられました。それらを踏まえ気がついた点、目についたのは次のような点です。

① 研修は男性を対象としていませんでしたが、女性の活動を目にした男性が研修を望んでいます。
事実参加した男性もいます。

② 女性達が頭で覚えることに疑問を持っていましたが、学んだことを確実に発揮しています。
これは、女性の隠された才能かもしれません。

③ 子供の下痢が3割減ったことや子供の予防接種に非常に積極的になりました。
家庭で経口補液剤を作って飲ませるようになり、手洗いも徹底するようになったそうです。

④ 男性が聞く耳を持たなかった家族計画も、今は夫と共に産院へ来るようになりました。

⑤ 助産師がいない地域に5人の助産師を誕生させ、更に3人が来年から続きます。

事業の視察にいらしたJICA地球ひろばの田和氏から
インタビューを受けている、委員会の面々

コニナブグー村での「話し合い学習会」を終えて
『今日もアワの授業をありがとう』と踊っているところ

まだまだ、多くの発見がありました。

村の女性達に切っ掛けを作ると、それを果てしなく広げていく力と勇気を持った人たちであることを再認識しています。

今回この事業の終了に当たってJICA地球ひろばからカラ担当の田和美代子さんが村へご視察にいらっしゃり、3泊して下さいました。村の女性達、自主管理委員会、村長、カラスタッフと多くへインタビューなさって、活動の詳細をご覧下さいました。

● 2011年10月から新事業が展開します。

このたびのマリ出張は、外務省による、『外務省NGO連携無償資金協力』(通称N連)事業の開始のための契約と、JICAの草の根技術協力事業の契約の為の出張です。

合わせてこれらの新規事業について、現地スタッフとの詳細な打合せと、準備のためです。

N連事業対象場所は、バマコ市から53kmニジェール河に沿って北上した河畔の、大型のスウバ村（人口約6,000人）で、ここに村の管理による診療所・産院合体型の医療施設の建設です。これは、スウバ村から長い間建設の要請がありヤット陽の目を見ました。この医療施設のために、村自体で既に准看護師と助産師を育成し、建設を一日千秋の思いで待っていました。

10月4日から開始された事業は、建設に先んじてソフト面からのスタートで、建設目的や診療所管理、村人への病気予防や、公衆衛生知識の普及と、診療のみならず多くの要素を含んだ診療所の建設事業であることの説明から始まりました。

数ヵ月後からは、9月に終了したJICA草の根技術協力事業のトゥグニコミュンでの保健事業の経験を活かしてスタッフのアワと、私（村上）が担当して村の人たちへ病気予防や公衆衛生についての啓発学習を行なう予定です。この事業期間は7カ月で終了し、4月末には新しい診療所がオープンします。

その頃には、医者も、国家資格を得た看護師と助産師、そして薬剤師も揃います。今後、折りにふれ経過をご報告いたします。

次いで、引き続きJICAの草の根技術協力事業（草の根パートナー型）が10月20日から開催されます。これは3年間に渡る教育面の事業で、3コミュン（クーラ、ドウンバ、そしてトゥグニコミュン）の人口約30,000人を対象としています。

村の人たちが未だよく書いたり、読んだりすることが出来ない部族語のバンバラ語指導教師の育成と、ほぼ毎年カラが実行している識字教師育成研修会で優秀な成績を修め、既に村でバンバラ語の識字教師になっている人たちへのフランス語の研修会です。

研修は2コースあり、先述のバンバラ語教師（初級コース）の育成と、フランス語も可能な識字教師(上級コース)の育成です。上級コースの講師は、これらの地域にある数少ない小学校の先生を8人お願いし、8会場（村）で1年に9ヶ月間学ぶコースです。

最初の年は、1年生と2年生課程の学習から始まり、3年間で6年生課程を修了するものです。使用する教科書もマリの公立小学校と同じものを2人に1冊の割合で揃えました。
先日ヌムブグー村へ行った時に、この上級コースに参加する青年に感想を聞きましたら、「イヤー、本当に嬉しい」と言ってバク転し喜びを表していました。

この事業はマリで初めての識字学習内容で、非常に期待されています。更にこの村の村長は、非常に人々から信頼されているのですが、字を書くことも読むことも出来ません。時には村長として書類にサインをお願いすることもあります。そのため会う度に私が『識字教室へ行っているの?』と聞くのですが、今回は先に彼から「今は識字教室の生徒だ」と言っていました。この研修会の状況も又ご報告いたします。

● その他の継続事業について

野菜栽培

今年も雨季がほぼ終了し本格的な野菜栽培が10月末頃から始まります。

現在カラの活動地域35カ村の内、16カ村に女性主体の野菜園が造成されています。それぞれの野菜園では女性達の持分の区画を除草して準備しています。
一方、新しい耕作期に向けた野菜種の購入の会費を集め、今期は何を栽培するか等の会議を開いています。

女性適正技術の活動

雨季でも女性センターでは活発です、先月9月は貸付事業の返済月でした。
現在9カ村で貸付事業を継続しています。既に10年継続している村もあります。このうち10カ村では5ヶ月間で10,000cfa(日本円1,800円位)の貸付けです。今まで収入の無かったおばさんたちにとって、大きな資金です。

ママブグ村の母親の一人は「この事業で得た収入で、子供に昼食のビスケットを買うお金を持たせることが出来るようになったので、学校へ行かせることが出来るようになった。」と本当に喜んでいました。

マリの小学校では自宅へ戻り昼食をとり、また学校へ行くので、学校まで距離があると往復が困難です。しかしお金が無いと村の店で何も買うことが出来ません。

習い覚えた技術の活用や、調味料の商いで利益を得て5ヵ月後に利息10%を支払い、この期間に更に協働で貯えた資金を元金に加えて、新たに貸付人数を増やしています。

識字学習

雨季で農作業が多忙な為に基本的には6月から9月末まで休講です。ソロソロ開催されますので、その準備を行っています。

保健衛生事業

9月終了した、JICA事業の内容がそのまま継続しています。この事業で、育成された女性保健普及員（通称ケネヤムソーの会:K会:女性保健普及員）の目覚しい活躍が目立ちます。
それと、同時にこの事業の枠内で育成した助産師と、その村へ産院を建設し、村の人たちの力で管理・運営されています。村が一体となって病気の予防を行なっているのです。

K会の女性達の活動で子供の下痢、自宅出産、子供を世話するお父さんの増加、子供予防接種の増加、など数々の成果が村の人たちから聞かれました。31カ村のK会の半分は、10月中旬まで農作業が多忙で、村人への「話し合いによる学習会」を中止しています。

普及員になる為に、書くことなしに記憶によって13日間の研修会で学びましたが、忘れている箇所もありますから、復習をアワの指導で行いました。

マダマダ多くの困難がありますが、明るい兆しの見えている活動です。

10月のマリから　代表:村上 一枝

次回の事業はどうなるかと、毎日、毎日、一喜一憂しながら過ごした日々でしたが、それも解決し、今回は新しく10月スタートとなる外務省NGO連携無償資金協力（以下N連とする）事業の契約のためにマリへ来ました。
バマコの空港は5月に来た時よりも整備されて清潔感がありますが、赤いビニールでグルグル巻きにされた巨大でたくさんな荷物と、出迎えの人が異常に多く、熱気で蒸しかえっていて、気温（34度）以上の暑さでした。

出迎えてくれたジャワラに早速今年のトウジンヒエの作柄について聞きましたら、非常に悪いということです。この原因は、気象局と農業省から、雨季のはじめに「今年の雨季は11月末まで降雨がある見込なので、たくさん作付けるように」と言う広報が流れたのだそうで、その為に人々は、8月末まで一生懸命にトウジンヒエだけでなく、ササゲ、落花生や近年海外に多く輸出される人気のゴマを作付けました。
しかしその予報が大きく外れ、バマコ以北60kmの地域では非常に降雨量が少なかったのです。作物は育たなく、6・7月に作付けたものしか実っていません。それらさえも昨年より作柄は減っています。村へ入る街道には、予報を期待してかなり広い面積にゴマ畑が一面に広がっていますが、白い花をつけたまま立ち枯れた状況です。ササゲや落花生の収穫も非常に少なく、3ヶ月で収穫された落花生は、とても小さいです。

これらに比較すると作柄が割りと良好なのはソルガムでした。現在の市場価格は例年よりも高値で、トウジンヒエが1kg・180cfa（100cfa=17円弱:通常はこの時期130cfa）、米も300cfaから450cfaに上がっています。

今年はまだ昨年に収穫したものを購入しますから、高いとは言え量はあります。ですが、来年は今年の収穫分を食べルコトになるため、本当に食糧難になります。ヌムブグーの村で聞きましたら、「来年食糧がたりない時には村はどうするの?」、答えは「いつよりヒエを少なくしてバオバブの葉っぱを混ぜてドロドロにして、腹を膨らませるさ。ヒエの無い人には貸し付けて翌年に返してもらうが、又凶作だったらあげたままになる」と言うことです。

次に新事業について、通常スタッフは雨季の間は多少暇はありますが、今年は、同月に始まる2新事業へ向けての準備にアレコレと追われ、特にJICA事業ではかなり広い地域（86カ村・現地スタッフ総勢15人、指導講師15人）をカバーするので、前線隊として、各論的に動くことになる村に住むアシスタントスタッフへの指図で多忙を極めています。

新事業で、村の人たちから大きな期待が寄せられていて、開催が待たれているのが、フランス語の研修会です。

新しい橋と舗装された道

この事業のための村間の連絡は主にバイクか自転車ですが、雨季明けの道は非常に壊れていますから、そこを通るバイクの故障も多くあります。数年前には、アワが女性適正技術の指導に出掛けて行っての帰路、ドロにはまって転倒し7kmの道をバイクを引きながらトボトボ帰ってきたこともありました。アフリカで事業を展開するに当たって、どんなことが苦労か?　と問われると、雨季の交通手段と言えるかも知れません。

マリ到着翌日の10月4日の午後、大使館でのN連事業の契約式を終え、日本の青年海外協力隊事務所を訪問してきました。現在は協力隊員が7人、更に4日に到着する2人が増え全員で9人になります。NGOとの立場の違いはありますが、人々を支援する、という同じ目的で働くのですから、若くて元気のいい協力隊員の活躍に期待しています。

作柄の悪いトウジンヒエ

このように大使館への訪問や協力隊事務所の訪問には、カラの事務所からニジェール河を越えて街に入りますが、雨季には通行が不可能となるニジェール河にかかるもぐり橋（雨季には水量が増して通過不可能）が、立派な近代的な橋に変わっていてビックリしました。もぐり橋の時にはゴツゴツした黒い岩肌が見えて、狭い場所にマンゴや季節の野菜が売られていてなかなか風情のある光景でしたが、それが一変してしまいました。側にあった発電所もはるか遠方に見え、人々が水浴びをしたり、洗濯していたバギンダ村へ入り込む運河も価値を低めたようでした。
片側2車線で両側に歩道もある綺麗な橋で、周辺の道路も舗装になりました。雨の日も人々にはどんなにか楽になったでしょう。しかし、河の流れも岩も見えなくなり、近代化の影の寂しさも感じさせる光景でした。

もう一つの話。それは、日本大好き（にさせてしまった感のある）な運転手セイドゥの話です。
「先日のジャポネ ムソーのサッカー試合（ムソーとはバンバラ語で女性、なでしこジャパンの試合の事）を全部TVで観た、本当に素晴らしい!!嬉しかった。」と絶賛しきりです。

試合の後には、彼が何処に行っても「ヤアー、セイドゥ　カ　ムソー　カイン」とアチコチから声がかかったそうです。これは「セイドゥのひいきにしている日本の女性たちはすごかったね」というような意味で、すっかりなでしこジャパンの熱烈なサポーターとして認知されていました。
私が「じゃ、負けた時はなんていわれるの?」と聞くと「今回はチャンスがなかったな、今度があるさ!　と慰められる」と言っていました。

マリ共和国への旅

神山ファミリー

2011年5月 私と妻、そして娘が先輩である村上さんが待つマリ共和国へ行った。

神山 博光

あれから5カ月、家のベランダで夜空を見ていると、この空はアフリカへ通じているのだと思う。マリの村で村上さんとウイスキーを飲みながら私の好きな女性歌手のMDを聞いた。村上さんは、カンちゃん（私の通称）の女性感はこうなんだ、と、一曲一曲口ずさんだり、辛辣な言葉を投げかけていた。なんとなくその言葉にプロジェクトを動かす村上さんの生きざまを見たような感じがした。

村でカラの行なってきたプロジェクトの見学をした。セイドゥの運転するトラックでアチコチの村を訪ねた。子供を生むには産院までは遠い、その為に自分独りで生む、死産が多い、産院が必要になる。産院を建てても助産師がいない、助産師を育てる。育てる為に都会の病院へ送りたいが人材がいない。子供を生むにもお金がかかる、男はくれない、女性自身でお金を得る手段が必要になる。畑を作る、井戸が無い、井戸を掘る、作物が動物に食べられないように柵を作る。病気にならない為には衛生教育が必要になる、村には黒板が立てられ、ポツポツの出来た絵が描かれてあった。水疱瘡の絵だ。

会話は出来るが、読み書きは出来ない。絵を描いて言葉で説明する。村から選ばれた女性達は、カラのスタッフから指導を受けて村で仲間に説明していく。村の人たちは、仕事が終ってから夜に文字を習う為に集まる。場所と人材が必要になる。

処々にわたるカラの「人を思う・人を生かす」活動を知った。アフリカ人、日本人スタッフが一段となっている行動に、今まで感じたことのない尊敬の念を感じた。

私には、今アフリカが抱える問題など、と言うことは考えられないが、せめて出来ることとして、先輩である村上さんの率いるカラの活動に出来るだけの支援をさせていただければ、という思いでいる。

とうとう行くことができました、長年行かなくては、と思っていたマリに。

神山 明子

今までスライドや、代表の村上さんからの話から想像していた場所に、大きなワクワク感と不安感の両方が行ったり来たりしながら、マリの空港に到着。

夜9時頃、街を車で走ると皆なで家の前の道端でワーワーと話したり、食事を取ったりしていました。この頃日本では、地震で自粛ムードが高まりひっそりとしていましたので、なんだか「生きるパワー」が沸き出ているように感じました。翌朝スーパーで水と果物を買い村へ。途中の路ではやせ細ったヤギや牛を売っている人、イロイロなサイズの瓶につめたガソリンを売る人、子供たちはナッツを袋つめにして売りに歩いています。誰もが知恵を絞ってあるもので生きていこうとしている。「これがない」とか「電気がない」とか言うこともなく、ないものの中で淡々と生きていく清らかさのようなものを感じました。
物があり、囲まれての生活に慣れてしまっていた私は、感謝の念を忘れていたなーと反省しながらの村への旅でした。最初に到着したモバ村までの間には、他のNGOが建設したトイレやら市場をかいま見て、多くの支援が入っていることを知り、現地の人が本当に必要とするものは何か、と改めて考えさせられました。

短い日程でしたが、カラの事業による農園や産院などのプロジェクトを時間に追われながら、それでも沢山見て回り、助産師さんの話も聞き、これら全て村の人たちのニーズに合っているものでした。女性の保健衛生普及の学習会にも参加し、読み書きの出来ない人たちが沢山集まり、新しいことを学ぼうとしている意欲が伝わってきました。スタッフのアワを中心に村の女性達は熱心に仕事をして、収入を得、自信を得るようになったことを聞き、現実世界に強く生きている女性を対象にしたプロジェクトは、非常に効果的だったと思い、今まで日本から支援して来たことが成果をあげている姿を確認できました。

村にはほんの3日間の滞在で、アッという間に帰ることになり残念でしたが、考えていたよりもマリがずっと近くなり、これは、人々の暖かい気持ちが伝わってきたからでしょうか、バマコ事務局のジャワラさんの穏やかな笑顔、日本びいきの運転手のセイドゥ君、私たちよりも日本を愛してくれているようでした。教えてもらったバンバラ語も忘れてしまいましたが、アワの作ってくれた食事はとても美味しく、又食べに行きたい思いです。

国境を越えて活動するカラのスタッフの方々の忍耐と努力に脱帽の数日でした。発展途上国への支援の為にカラはマリに存在してるのですが、垣間見た活動や現地の人々から、真のお付合いの姿を感じました。

10日間のマリの旅は驚きの連続でした。

神山 有佳

東京からパリ、パリからバマコ。着いた時の印象は、意外に近かったなあ、というのと、思ったより暑くないなあ。東京でのジリジリ、ムワっとした暑さから、初めて訪れるアフリカのよっぽどの暑さと過酷な旅を覚悟していたのでしたが、快適で楽しい旅でした。これも、訪ねる場所を与えてくれたカラと、連れて行ってくれた両親に感謝です。

マリ到着後最初の数日は、ボーっとただただ圧倒されていました。火炎樹の赤さ、賑やかで埃っぽい街、道路に溢れる変わった形のオブジェ、大きな目をしたマリの人。でも着いてからしばらくすると何か分からないエネルギーが身体に沸いてくるのを感じました。

人と物に溢れかえったゴチャゴチャした市場を通り抜け、長くて美しいニジェール河を横目で見、甘いリンゴの炭酸水を飲み、荷物と人とでいっぱいの車に手を振り、バオバブの個性的な姿に感激しながら、村上さんの、この地での冒険にも似た話しを聞きながらの車の旅はとても楽しかった。

時折挟まるセイドゥとのバンバラ語とフランス語での冗談話と笑顔、道端案内。美味しい木の実、石鹸になるカリテの実、ただの山に見えるアリの巣がとても良いレンガになるという、そこにある全てを知って、そして利用する。どんな仕組みで、なぜ動いているか分からない物に囲まれ、それが暴走してしまったような日本の暮らしを、少しうとましく思ったりもしました。

でもマリも素敵なところだけではありませんでした。不衛生な環境、育たない作物、放置されるゴミ、そこから生まれてくる様々な病気、エイズ、識字率が低いことによる情報共有の難しさ、病院、産院の不足。畑で子どもを産み落とす女性の話に衝撃を受けました。カラはその問題に根本から立ち向かい、ただ物や知識、お金を与えるだけではなく、そこに住む人たちと、共に解決して来たのだなあ、とその遠い道のりに驚き、圧倒されるばかりでした。

もっと話を聞きたい!もっと知りたい!と思っているうち、時間が来てしまい、マリの人たちの表情豊かな顔が見られなくなるのに戸惑ったのも束の間、あっと言う間に日本の生活に戻ってしまいました。

でも、時折あの幸せなニームの下での食事を思い出します。ネコとニワトリとヤギとヒトと。みんなで食べたアワのご飯。タマネギと鶏肉のヤッサプーレ。お腹がはち切れるほどに食べたのに、もっと食べたくて帰国後に何度作ってもあんなに美味しくはなりません。またあの木の下で食べることを楽しみに。

このような旅の機会を与えていただき本当にありがとうございました。

モバ村での神山一家